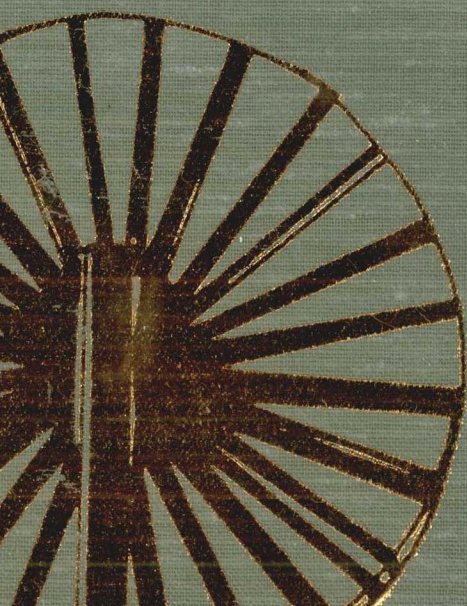


# 麻糸車

山本 今子



# 麻糸車

山本今子

著者紹介

本名 山本いま

大正 7 年愛知県渥美郡田原町大草志田生れ

住所 愛知県豊橋市住吉町 36

麻糸車

---

平成 2 年 12 月 12 日 初版発行

定価 1500 円  
(本体 1457 円)

著 者 山 本 今 子

発 行 講談社出版サービスセンター  
東京都文京区音羽 1 - 2 - 2  
電 話 03 (941) 5572

印 刷 星野精版印刷株式会社

製 本 黒田製本所

---

© Imako Yamamoto 1990 Printed in Japan  
ISBN4-87601-235-0

もくじ

|                           |     |
|---------------------------|-----|
| 焼け出され                     | 5   |
| 嫁の初産 <small>ういざん</small>  | 25  |
| 袖に涙の                      | 39  |
| 吉田通れば                     | 55  |
| 春雄の誕生                     | 69  |
| 小部屋 <small>こへや</small> の女 | 105 |
| 花柳病                       | 115 |
| 次枝 <small>つぎえ</small> の結婚 | 127 |
| 戦争に負けて                    | 132 |

|             |     |
|-------------|-----|
| 麻糸継ぎ……………   | 142 |
| 二人の息子……………  | 155 |
| 老女となつて…………… | 164 |
| あとがき……………   | 171 |

麻

糸

車

山  
本  
今  
子



## 焼け出され

豊橋市が空襲を受けたのは、ちょうど三年前の昭和二十年六月十九日の夜だった。

たみ乃は宗一郎との間に、二人の孫の布団を敷き、奥の八畳間に寝たところだった。

「ウーウ。ウーウ。ウーウ」

サイレンが不気味に鳴り響いた。

「今夜もきたようだ。今夜は何処をやる気ずらかなア。ラジオをつけよ」

宗一郎は寝たまま言った。

たみ乃は寝巻のまま茶の間に行つて、ラジオのスイッチを入れた。電燈を灯して、時計を見ると十時四十二分である。

「東海管区空襲警報発令。B 29 約百四十機、志摩半島上空より侵入、東海地方上空に向つて進撃中」

たみ乃はハツとした。昨夜は隣の四日市が空襲された。ここ二十日ばかり、毎夜空襲警報の出

ない夜はなかった。その度に何処かの都市が焼かれていたからである。

「今夜はこっちへくるらしいよ。とにかく、若い者を起さにやア」

たみ乃は階段の下から宗之を呼んだ。次に各部屋の電燈を灯した。電燈には黒い紙カバーで遮光してあるので、足元が明るいだけである。それでも家族が避難するには大助かりであった。襖も障子も全部はずして倉に入れてしまつて、階下はガランとした広場になっていた。

茶の間のラジオは続けて「豊橋市に接近」と告げている。

「今夜は豊橋の番だぞ。早く着替えて、子供を防空壕へ避難させよ。早く、早く」

宗一郎は着替えながら叫んだ。

屋外も騒然となった。

「空襲警報発令。敵機襲来」

町内の防空団長が、メガホンで叫びながら駆け抜けて行つた。

宗之は長男の布団と、自分達の着替えの包みを下げて、ドドドと下りてきた。

嫁の和子は、小学一年の長男に鞆を掛けさせて手を引き、着替えた物の風呂敷包みと蓐座ござを丸めてかかえていた。畳は全部あげて倉に入れてある。床の上に蓐座を敷きその上に布団を敷いていた。

たみ乃は二人の孫の着替えを手伝つた。寝入りばなを起された二人の子供は、半睡状態で、く

らくらして、なかなか着替えにくく、氣ばかりあせった。

長男を防空壕へ入れて引き返してきた和子は、次女を抱えるようにして裏口へ向った。

「信代ちゃん、目をさましてね。今夜は豊橋が焼けそうだよ。はい、防空頭巾かぶってね。早く早く」

長女の信代は小学校の五年生だけあって、直にシャキツとした。枕元のランドセルを背負い、ついでに着替えの風呂敷包みを持つと、

「おばあちゃん早くきてね」

と言って、裏口へ向って走り出した。たみ乃は寝巻の上に平常着を重ね、手早くモンペをはいた。

この時、遠雷のような音が起った。続いてヒューンという飛行機の旋回音が起り、爆音が聞えた。

「とうとうきたぞい。おそがいこつちゃ」

たみ乃は布団を畳みながら一人言ちた。布団を脇に抱え、枕元の風呂敷包みを持って、急いで裏口へ向った。

「駅の方は火の海だぞオ」

誰か叫びながら表通りを走り去った。

宗一郎は防空壕へ定められた物を運び終え、自分の寝ていた布団を持ち出している。宗之も二階に駆け上って行った。和子は勝手から、米や麦を袋ごと持ち出している。たみ乃が裏畑の壕の口まで行くと、信代が中から荷物を受取ってくれた。

ゴンゴン、ゴンゴン、空を蔽う飛行機の爆音、何を落すのか、ドカン、ドカン、という大きな音。バリバリ、バリバリと炒り豆のはじけるような音。これらの音がないまざって、遠くから、ワーンと夜の空気を振動させて、押し寄せてきた。

たみ乃は壕の入口からすぐ引き返した。仏間へ行った。仏間も畳は上げて、倉へ入れてしまったので、仏壇の前に座ると、ヒイヤリした。たみ乃は仏壇の引き出しから、かねて用意して置いた、大風呂敷を取り出した。手早くかたわらに拵げると、

「とうとう家が焼かれるかも知れません。御先祖様方、かにしておくれましょう。暗い穴ボコへお入れして、まことにすみません。なんせアメリカの飛行機が焼夷弾をまき散らして、焼き払いますんで、ちいとの間御辛棒願います」

たみ乃は生きている人々に詫びるようにしゃべりながら、手当り次第に、位牌や仏具を投入れて包み、一まず防空壕へ運んだ。

このころから、表通りにはわかに大勢の人の走る足音が、道路一ぱいに響いた。不思議に人の声は混じらなかった。唯パタパタという足音が入り乱れて、東へ東へと向っている。人々は無言

で、ひた走りに走って行くのだった。

切林家の大人達は、何回か母屋と壕の間を往来して、手当り次第に寝具や、勝手道具、納屋の農具まで運び出した。これらの雑器までは壕に入らない。果樹の畝間に投げ出された。宗一郎はバケツや水桶、盥などに井戸水を汲み込み始めた。宗之もすぐ手伝って、入れ物という入れ物に次々と水を汲み込んだ。終いには、鍋や釜にまで水を張った。

西の空は真赤に焼けている。その炎の照りであたりはうつすらと明るい。

ゴンゴン、ゴンゴン、にび色の空を蔽うB 29の飛行音は次第に頭上へ近付いてきた。ヒューン、パツ、ドカーン、ドカーン、ガラガラ、バリバリバリ、という音が、絶えず続いている。

宗一郎と宗之は、時たま壕の外に出て、空を見上げている。たみ乃も和子も、壕の奥から中程にかけて積み上げた布団に体を寄せ、両脇に子供をかかえて、息を殺していた。

頭上でヒューンと飛行機が旋回した。パツと何か開くような音が続いて起った。

「おい、見よ。花火のようだなア」

「ホント、きれいだ」

宗一郎と宗之は壕の入口から頭だけ出して、空を見上げている。その直後、バリバリバリと耳を聳するような激しい音が起った。続いてドカーン、ガラガラ、ドカーン、ガラガラ、……と何かブリキの缶でもたたきつけるような大音響が炸裂した。

二人の男は思はず首を引込めて、頭巾の上から耳を押さえた。また続いてバリバリバリと機関銃が射撃されたような音が耳の端で起った。宗之は身を乗り出して、

「危いぞ。火を消さんと焼け死ぬぞ」

言いざま壕から跳び出した。母屋も、納屋も燃え上り、あたりは昼間のように明るかった。宗之は壕の近くで、はじけながら燃え上った焼夷弾に、バケツの水をザツと浴せた。火はうまく消えた。

見ていた宗一郎は、柄の長い肥柄杓を使って、肥桶の水を、あたり一面バリバリ燃え上る焼夷弾に、投げつけた。思いがけないはなれた所の、蜜柑の立ち木がパチパチ音を立てて燃え出した。宗之が駆けつけて鍋の水を掛けた。和子も跳び出して、釜の水や、瓶の水を宗之のところへ運んだ。こうして壕の近くに落下した十カ所余りの焼夷弾を消し止めた。

ゴンゴンいう飛行機の音は、相変わらず空に満ち、次第に東方へ移動して行く。

たみ乃は怖る怖る壕の入口から外を覗いた。母屋はパチパチとすごい炎を波打たせて燃え上っている。額がこげそうに熱くなった。向い側の家々も炎を吹き上げている。道路は両側の家々から一斉に吹き出す炎が波打って火の海である。

と、突然たみ乃は台所の大バケツを持って、井戸端へ走った。

「バカッ！ 危ないぞ」

「止めよ、おふくろ」

二人の男の制止の声が、同時に飛んできた。たみ乃は井戸のポンプを渾身の力を込めて押した。じきに水は一ぱいになり、よたよたと大バケツを運んできた。井戸は母屋から少し離れた、裏畑の入口にあつた。

続いて和子も水汲みに走つた。男達はその水を、土蔵と母屋の間に植えてある榎の生垣あびに浴せた。女二人は水を汲み、男達はその水を高い生垣に投げ上げてかけた。

火は次第に母屋を包み、もう熱くて、井戸端に近付けなかつた。やがてすさまじい音響と共に、総二階の切林家は焼け落ちた。それは切林家の没落の音でもあつた。納屋は母屋よりずっと早く焼失した。哀れだつたのは、たみ乃が孫達の食料にと、大切に飼つていた六羽の鶏たちだつた。一羽残らず黒こげになつてしまつていた。しかし切林家の土蔵は助かつた。

これは宗一郎の手柄と言つてもよかつた。ちょうど一ヵ月ほど前の日曜日に、宗一郎の発議で一家総出で、母屋の畳、襖、障子、家具や衣類を倉に詰め込んだ。宗之と二人で、倉の入口や窓を粘土で嚴重に塗り固めた。あるいは倉の囲いに榎が植えてあつたのがよかつたのかも知れない。母屋の燃える盛んな炎に、呆然自失して四人の大人が立ちつくしている時、

「熱いよオ。水が呑みたいよオ」

「私も汗びつしよりだよオ」

「まあ防空頭巾取つてもええかねエ」

三人の子供は周囲の熱氣に当てられて、汗まみれになつて、防空壕から這い出してきた。四人の大人達は、それで吾に還つた。

たみ乃と和子はすぐ幼い二人に馳け寄つた。

「おー可哀想にのオ。夏だというのにこんな綿入れの頭巾をかぶせられてのオ。さあおばあちゃんが脱がしたげる。まあまあ髪の水が汗で貼り付いちまつて……」

たみ乃は腰の手拭いを取ると次女の明子の頭や顔や、首などを拭いてやつた。長女の信代は自分で防空頭巾を脱ぎ、モンペの腰に下げていた手拭で、顔と首を拭いている。長男の直之は母から薬缶の水をもらつてゴクゴク呑んでいる。二人の姉達も、

「私にも、私にも」

と、母のそばにまつわつた。

壕から少し離れた蜜柑の木の下に筵を敷いてもらつて三人の子供は横になった。

「一番先に、水を汲めるようにせにやあなア」

井戸の屋根はトタンぶきだった。今しがた母屋の熱氣を浴びて、柱が燃え出し、屋根が落ちたのだ。熱氣をはらんだ風が、トタンを井戸の向こう側に吹き倒したため、火が収まれば水は汲めそうである。

東隣も西隣も、広い屋敷を持った農家だったのが幸いして、熱氣に焙られながらも水を吞んで、切林家の大人達は火炎の鎮まるのを待った。

この頃からB 29の爆音はしなくなった。

「何時だやア」

宗之は炎の明りに腕時計をすかして見た。

「三時五分前」

「まあじき夜が明けるなア。みな一休みせまいか。何と思っても仕方がないわい」

宗一郎は子供らの方へ歩きながら、初めは宗之に言い、終りは自分に言い聞かせるような呟きとなった。

和子は急いで、蜜柑の下の本根に積んである筵を二枚敷いた。大人達四人は、一つの薬缶の中に置いて四隅に座った。皆疲れ切っている。眼だけ光って興奮していた。

「銀行はどうなったずらかなア」

宗之はさつきから気になっていることを口にした。鉢巻の下型のよい眼が沈んでいる。

「まず駄目だと思わにやなア。なんせ駅の方から火の手が上ったずら。こっちはこいでも、まあしまいの方だったからなア」

「夜が明けたら、一度見に行ってくる。幸い自転車は助かった。ほんとによかった」

「きつと町じゅう燃えとるぞオ。まんだ熱くて自転車のタイヤがこげるかも知れんぞ」

「タイヤは貴重品だでねエ。まあいいと時間を置いて、熱気が冷めてからの方がええかも知れんねエ」

和子が宗一郎に和した。

夜が白々と明けてきた。

「さあ、火を消さまいか。まあ、井戸が使えるずらよ。ポンプが熱かったら、濡れた風呂敷でも巻きつけてなア」

たみ乃は壕の中から、古い風呂敷を取り出してきた。ポンプの汲み手はまだ熱かった。乾いたままの布を巻いて二つ三つポンプを押した。汲み出された水で布を濡らして、巻き直し、まずたみ乃が汲み手になった。和子が大バケツと雑巾バケツをかたみに運んだ。宗一郎と宗之が下火になった母屋に水を掛けた。たみ乃はじきに息切れがして、和子と交替した。

「これ見い宗之。あいつらは石油缶をばらまきやがっただぞ。ばかに早く大きな炎が燃え上ったものなア。こいじゃア木でできた家はひとたまりもないわい」

もうもうと立ち昇る湯気の中から、宗一郎と宗之は、赤く燃えた缶を棒切れの先にひっかけて投げ出した。

たみ乃も和子も手を休めて、我家を焼いた焼夷爆弾の燃えかすを見詰めた。